

# 湯けむり こみゆにてい

平成11年2月23日～3月19日

会ったこともない他人と一緒に、お風呂に入る。思えば、それはとても奇妙な習慣かもしれませぬ。けれど、日本人にとっての銭湯は、そんな奇妙さも感じさせないくらいに、身近で思い出のつまった生活の場です。

こうした入浴方法は、元は川での水浴、温泉、仏教の施浴等から始まり、特に江戸時代に銭湯という形で大流行しました。そして、人々のコミュニケーションの場として、重要な庶民文化の一つとなりました。今回の展示では、そうした銭湯の歴史を中心に、どんな時代でも逞しく生きてきた「庶民」の想いや息遣いを、様々な資料から、お見せします。

## 展示資料一覧

<>内は当館請求記号

### 風呂と湯の歴史

#### <江戸期>

銭湯の始まりは、鎌倉時代にまでさかのぼると言われています。もともと、銭湯は内湯を持つ習慣のない都市部で盛んでしたが、特に都市生活の発展した江戸時代には、それまでになく数多くの銭湯ができました。当初の銭湯は、「風呂屋」＝蒸し風呂の銭湯と「湯屋」＝浴槽のある銭湯とに区別されていましたが、蒸し風呂では多くの客がさばけない事から、次第に、湯槽に戸棚をかぶせたような「戸棚風呂」や外部に湯気を逃さないよう低く作った入り口「柘榴口」といったものに形を変え、湯屋と融合していきました。特に、「柘榴口」は、当時の銭湯の「顔」であったため、その装飾は、現在の銭湯の装飾の源流となっています。そして、もう一つ特徴的だったのが、男女の混浴でした。しかし、風紀の乱れから、次第に取り締まりが強化されました。

1. 浮世風呂 江戸の銭湯

神保五弥著 東京 毎日新聞社 1977.12 <GD68-9>

江戸の銭湯の始まりは、伊勢与市という者が、新しい町・江戸の工事人足や移住者を対象に始めた蒸し風呂でした。

2. 洗淨風俗史話 入浴と洗濯のあゆみ

落合茂著 酒々井町（千葉県）文芸復興社 1993.4 略年表：p175-176<GD68-E23>

3. 公衆浴場史

東京 全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会 1972 限定版 <GD68-4>

<明治・大正・昭和初期>

江戸時代とは、銭湯の姿が、がらりと変わりました。温泉を倣って、柘榴口を取り払い天井を高く室内を明るくし、洗場や浴槽を広く、また洗い場の汚れが入らないように浴槽の端を高くした風呂が大流行、「改良風呂」と呼ばれました。また、文明開化に伴い、外国人の目を恐れた政府は、銭湯の風紀の乱れを厳しく取り締まり、混浴は厳禁となりました。また、大正や昭和初期には、いかに快適に銭湯で過ごすことができるかと、施設の改善が追求され、タイル張りやカランを導入した「モダン風呂」が生まれました。また、外装が現在の銭湯のような書院造りになったのも、関東大震災後のことだと言われています。

4. 風呂と湯のこぼれ話 日本人の沐浴思想発達史話

武田勝蔵著 東京 村松書館 1991.4 新装版 <GD68-E19>

5. 入浴・銭湯の歴史

中野栄三著 東京 雄山閣 1994.11 <GD68-E25>

<戦時中>

燃料の不足から多くの銭湯が休業しました。

6. 帯広市古建築調査書 6 帯広湯

北海道建築士会十勝支部帯広分会、帯広市教育委員会編 帯広  
北海道建築士会十勝支部帯広分会 1989.3

<KA81-81>

<戦後>

戦争が終わり、時代が安定するに連れて、都市部でも風呂付きの家を持つようになりました。それに伴って、銭湯の需要が減り、休廃業する銭湯が相次ぎました。こうした銭湯の危機の打開策として、自治体が補助を行ったり、露天風呂やサウナといった特別な施設を備えた銭湯や大規模な健康ランドが現れたりしました。

7. 公衆浴場

東京 彰国社 1956 図版95p(解説共)

<526.4-Sy957k>

日本で最初のヘルスセンターの様子です。大広間に人々が集り、くつろぐ様が見られます。

8. お湯を楽しむ 新・五感入浴のすすめ

リビングデザインセンターOZON編 東京 リビングデザインセンター 1996.10

<GD68-G12>

昭和30年代に生まれた日本住宅公団は、質の高い都市住宅を目指して「内風呂」を採用。

内湯の普及が進められました。

9. 生き残り策の模索か転・廃業か ―客離れで岐路に迷う銭湯業界―

崎谷武彦 「月刊中小企業」 40巻4号 1998.4 (p34-36)

<Z4-191>

## 湯気の向こうの歴史

### <江戸>

江戸の銭湯の光景はとてみにぎやかです。低い石榴口を通り、狭い浴槽に入って行く人の掛け声や、湯が熱いのぬるいのと言い争う声、ぶつかったり踏んづけたりで喧嘩も多く、風呂に入れば歌を一節というのは、現在も同じです。また男女が混浴であったことから痴漢を退治する女性や、仲良く入浴する夫婦などもいました。やがて男女混浴は禁止されましたが、一つの浴槽を板で分けただけで、下に潜れば隣の湯に入れたり、湯屋の2階からわざわざ女湯をのぞけるよう格子窓になっていたりとといった有り様、風紀が守られたとは言い難かったようです。

### 10. 江戸入浴百姿

花咲一男著 東京 三樹書房 1992.3 <GD68-E16>

当時銭湯は2階建てで、男性には2階で菓子や茶が振る舞われ、幕末には、給仕の女性が登場しました。ちなみに、この資料の左端の男性は、格子窓から女湯をのぞいているようです。

### 11. 江戸の女たちの湯浴み 川柳にみる沐浴文化

渡辺信一郎著 東京 新潮社 1996.10 <KG276-G19>

「湯屋の唄 あかのぬけないこえばかり」

女湯には珍しく歌を歌う様子や、熱湯好きの江戸の風呂の様子が述べられています。

### 12. 江戸の風呂

今野信雄著 東京 新潮社 1989.2 <GD68-E8>

「わりゃア、よく俺が鞆玉を糠袋と間違えてつかんだな。それで湯をぶっ掛けたがなんとした。この黒砂糖の固まりめ」

にぎやかな男湯での喧嘩が描かれています。しかし当時は、女湯での喧嘩も相当激しかったようです。

### 13. 浮世風呂

式亭三馬著 神保五弥校注 東京 角川書店 1968 <913.55-Si317u-Z>

「(石榴口より覗き)や、夥しい尻だ。アイ御免なさい。…アイ老人でござい。ヤ是はいい湯だ、此の湯をぬるいという人は鉄砲のほうへ沈むか、この格子を外して釜の中へ入るがいい」

あけっぴろげな人々のやり取りがとてもユニークに生き生きと描かれています。

## &lt;明治・大正・昭和初期&gt;

江戸から明治にかけて、銭湯は大きく変化し、江戸時代のような喧燥は少なくなつたようです。しかし、銭湯に入る人々の間には、さまざまな交流があり、大正から昭和初期にかけて、小説等に、特にそうした人々の様子を垣間見る事ができます。また、銭湯は単なる入浴場所ではなく、人々にとっての「憩いの場」「くつろぎの場」だという思いが、資料からうかがわれます。

## 14. 洗う風俗史

落合茂著 東京 未来社 1984.10 <GD68-23>

当時、銭湯の風紀をただし、不潔感を払拭しようと政府による統制が行われました。その中で、江戸っ子の熱湯好きを戒め、湯の温度を80～90度に抑えるよう指示しましたが、その意味を誤解して、日に90回もお湯を入れ変えようとした銭湯もあったようです。

## 15. 風呂と湯の話

武田勝蔵著 東京 塙書房 1967 <383.6-Ta465h>

文明開化の流れで、洋犬を飼う事が流行し、銭湯にまで一緒に入れる飼い主が現れました。

## 16. 公衆浴場

東京 彰国社 1956 図版95p(解説共) <526.4-Sy957k>

設計者である建築家がどういった銭湯をイメージして設計したかを述べています。主に「憩い」「くつろぎ」といったテーマが上げられています。

## 17. 腕くらべ

永井荷風作 東京 新生社 1946.6 <KH385-E3>

## 18. 唄の自叙伝

西条八十著 東京 生活百科刊行会 1956 <911.9-Sa342u>

隣で湯をかけている男のマナーが悪いので、怒鳴ってやろうとしたところ、鼻歌で歌っていた歌が自分の作詞した歌だったので、怒るに怒れなくなってしまった様子が描かれています。

## 19. 「苦の世界—第二 浮世風呂」宇野浩二全集 第1巻

東京 中央公論社 1972 <KH663-1>

ある時、主人公は人の少ない午後の銭湯で、ひんやりとした洗場で昼寝するという楽しみを覚え、同時に銭湯に行くたび、自分と同じように昼寝する男に出会い、「一たん死んだものが息をふきかへすやうな」心地よさを感じます。そして、その男と親しくなり、奇妙な話を聞く様が描かれています。

ます。

## 20. 時世「浮世風呂」ごよみ 銭湯 宿六

「日本及日本人」 1577 日本及日本人社 1985.1 (p133-135) <Z23-68>

「芸者衆の流しとなると…きびきびとした動作でやらないと嫌われてしまうんですわ…いやにネチネチとやっていようもんなら、「もう結構よ」なんて止めを刺されて様ありませんや」

元三助の政吉爺さんの体験談。三助とは、銭湯に働く男性のことで、燃料を集める担当や下足番、釜たき番、背中流し、番頭等と階級があった。この呼称は、かつて銭湯に出稼ぎに来た三兄弟がおり、3人とも名前に助がついたため、親しまれて三助さんと呼ばれたのが始まりと言われている。

### <戦時中>

銭湯には、開くのを待つ人々の行列ができました。また、焼け跡ではわずかに焼け残った銭湯が開放されたり、ドラム缶風呂が作られたり、疎開先でもらい風呂をしたりして、人々は入浴しました。

## 21. 写真記録昭和の歴史 3 太平洋戦争と進駐軍

東京 小学館 1984.6 199p 27cm 監修：松本清張ほか <GB511-156>

## 22. 摘録断腸亭日乗 下

永井荷風著 磯田光一編 東京 岩波書店 1991.1 <KH385-E4>

昭和20年3月7日、戦時中で燃料もなく、なかなか開かない銭湯の行列に加わりながら、かつて花街通いをしたころの、銭湯にまつわる出来事を思い出し、「何事も、皆二度とは見られぬ夢なりけり。呵呵」と結んでいます。

## &lt;戦後&gt;

内湯化とともに、銭湯だけでなく、銭湯における人との交流も減少し、わき目も振らずに入浴する人々や海水パンツをはいて入浴する子供、シャワーボックスといった個室の入浴施設などが現れました。しかし、その一方で、自治体がコミュニティ銭湯といった趣旨で、銭湯と地域の活性化を推進したり、バブルバスや露天風呂といった施設、大正・昭和初期のレトロな雰囲気など、内湯では味わえない楽しさを味わってもらおうとする動きも出始めました。また今でも、人々に郷愁と安心感を与える昔乍らの景色や道具、実際に日々銭湯に通い、顔なじみになっておしゃべりをしたり世話を焼いたりする人々も、存在します。現在の銭湯は、そうした様々な面を併せ持っていると言えるでしょう。

## 23. 大浜永丞私史 八重山「浜の湯」の昭和

石垣 先島文化研究所 1992.9

&lt;GK112-E13&gt;

いつも同じ銭湯で顔を合わせてしまう上司と部下。部下はいつも頭を下げたり、背中を流したり忙しく、あるとき、それがいやで銭湯を変える。ところが、いつも行っている銭湯が混んでいたため、上司が別の銭湯に行ってみると、そこには、その部下がいた。気まずくなった二人は…。

## 24. 風呂の話

中村国雄著 東京 文理書院ドリーム出版 1967

&lt;383.6-N386h&gt;

「総理大臣もたまには銭湯に行き、庶民の喜び悲しみや不平不満を聞けば、政治が良くなる…」銭湯は庶民の憂さの捨て所と言い、中で交わされる話のパリエーションの豊富さや、「銭湯というところはあれでなかなかの教育場」という幸田文の随筆を紹介する。

## 25. 銭湯 松の湯の思い出

当別町(北海道) 松の湯 [1986]

&lt;DH475-E80&gt;

「湯から上がって待ってる男と女…上がったことを知らせようか、いやどちらが先に話をするか、ちよっぴり、意地悪る、おばあちゃん」

かつて銭湯には、男女の脱衣所にまたがるようにして、「番台」というものがありました。もとは主に、脱衣所のなかでの盗難や事故を防ぐためのものでしたが、逆に現在のような受付や待合室はなかったため、こんな微笑ましいエピソードも生まれたのでしょう。また、男湯から女湯にいる連れに声をかけてから湯を出る、という場面もあったようです。

## 26. 湯かげんいかが

森崎和江著 東京 東京書籍 1983.3

&lt;GD68-19&gt;

わき目も振らず入浴する女性や、独り言を言いながら背中を流す老女。下町と言えども、かつて

の暖かな交流はなく、それぞれに孤独な人々の様子を描いています。

27. 入浴の解体新書 浮世風呂文化のストラクチャー

松平誠著 東京 小学館 1997.5 付：参考文献 <GD68-G11>

ニュー銭湯やシャワーボックスなどを紹介するとともに、現在の銭湯は、単に内湯化を志向しているに過ぎないと指摘します。

28. おふろの楽園 あなたにピッタリの入浴法を伝授します

資生堂新規事業部編著 東京 求竜堂 1994.10 <EF32-G17>

地方で村おこしのために大きな温泉入浴施設を作ったりするように、都市部では、銭湯を、地域コミュニティーの場として位置づけようとする取り組みが行なわれています。なかには、銭湯でビールパーティーやカラオケ大会などイベントを行なったり、高齢者に無料入浴券を配ったりしているところもあるようです。

29. Tokyo 銭湯 map とっておきのお風呂屋さん

銭湯愛好会編 東京 ネスコ 1986.11 <Y88-4662>

「家に風呂あるけど、友達と一緒に来るよ、おもしろいから」

銭湯の2階で卓球をしたり、宿題をしたり、テレビを見たりする子供達。

東京都の援助を受け、コインランドリーや日本間、集会場、ホールなどを集めたコミュニティ銭湯が作られました。

30. フロ屋のおきて 7巻

藤谷みつる著 東京 集英社 1996.5 <Y84-E5790>

フロ屋を舞台に仲間の愉快的やり取りと、濡れた足で特にトイレには入ってはいけない理由など銭湯ならではのマナーが描かれています。

31. 銭湯 map 東京 銭湯へ行こうデータ編

町田忍、銭湯探偵団編 東京 TOTO出版 1995.6 <Y77-G268>

全国的に有名な「ケロリン」と書かれた黄色い風呂桶の始まりを紹介します。他にも、銭湯には欠かせない冷えた牛乳や、すっぽりかぶる女性用のドライヤーなど、懐かしく面白い写真も満載です。

32. 銭湯へ行こう

町田忍編著 東京 TOTO出版 1992.2 <DH475-E342>

大正や昭和初期など、古くに建てられた銭湯の、今でも現役で頑張っている姿が、鮮やかに撮影されています。懐かしい古い広告や体重計、風呂桶や網籠、それぞれに趣向を凝らした浴槽など、



